

非意志性の表し方

～シンハラ語と日本語を中心に～

ディルルクシ ラトナーヤカ

1. はじめに

言語が統語的に、音声的に、形態的に様々であることは当然である。しかし、すべての言語は、同じように人間として無限のことを表すことができる。すなわち、言語ごとに多少異なることはあっても、すべての言語にはすべてのことが表現できる何らかの方法があるということである。シンハラ語には、「非意志性」を表現する独特の方法があるのに対し、日本語はシンハラ語ほど「非意志性」の表現方法が多様ではない。しかし、シンハラ語にも日本語にも「非意志性」を表現する方法がある。本研究の目的は、非意志性の表し方が言語によってどのように違っているのかを検討することである。

2. 本研究でテーマとなる現象とその術語の定義について

本稿でテーマとなる現象については、シンハラ語、日本語、英語でそれぞれ多少異なった意味の術語が使われる。そのため、各言語で使われている術語には、一定の定義がないようである。しかし、全体的な意味としては、それぞれの言語で同じ現象を指していると考えられる。この章では、術語の相違は別として、本稿でテーマとなる現象が、各言語でどのように定義されており、この現象を表すにはどのような術語が最も妥当かを調べ、改めて定義を行いたいと思う。

2.1 シンハラ語と英語の場合

まず、本稿でテーマとなる現象は、「動作主の意志がない、あるいは動作主の

意志に反して引き起こす、あるいは引き起こすことになる行為」である。

シンハラ語では、J.B.Dissanayake (2001) が、この現象を表す文に対して「nirutsa:həkə wa:kyə」という術語を用いている。「nirutsa:həkə」とは、「努力なしに、あるいは、自然に」という意味である。つまり、「動作主が努力なしに引き起こす行為」ということであり、動作主が引き起こす行為に努力しないということは、その行為に対して、動作主の意志がないということになると考えられる。

英語では、この現象を説明するのに「Non Volitionality」という術語が使われるが、その定義として、Carmen Jany (2006) は、「Non Volitionality」とはコントロール欠如 (lack of control) かつ動作主性が欠如している (lack of agency) 現象だと述べている。それはシンハラ語での術語の直訳ではないが、全体的には「動作主の動作主性が失われた」という意味からシンハラ語の「動作主の努力なしに」と一致していると考えられる。

2.2 日本語の場合

日本語の場合、この現象を説明するのに様々な術語が使われている。それぞれの術語には類似点や相違点があり、区別するのは非常に難しい。以下では、日本語における術語とその定義を簡単にまとめることにした。

2.2.1 意志・無意志

鈴木 (1972) は動詞を意志動詞と無意志動詞にわけ、意志動詞は「誘いかける形と命令する形を本来の意味でも用いることのできる動詞」、無意志動詞は「誘いかける形と命令する形をこの意味で用いることのできない動詞」と定義した。

堀口純子 (1987) は、「意志動詞」は主体が話し手であるかそれ以外であるかということが文法的性質に大きく反映するとし、「意志」については、「話し手の意志」と「主体の意志」に分けて考えるべきだと述べている。

2.2.2 意図・非意図

杉村泰 (1996) は、「意図性」の意味的性質について、「何らかの目的のため」という意味が含まれていると述べている。そのため、「非意図」という術語は、なんの「目的」もなしに、というような意味を含意する。

2.2.3 自発と非意志

渋谷勝己(2006)は、自発とは、動作主体の意図にかかわらずに(あるいは反して)起こる、あるいは起こらないといったことを表す文法的なカテゴリーだと述べている。

『日本文法大辞典』(藤井正、p.301)では、自発を「動詞の相の一つ。自然可能ともいう。」としている。

『日本語教育大辞典』(p.199)では、自発表現について、人間の動作が主体の意志とは無関係に、あるいは、意志に反して発生する意を表す表現だと述べている。

日本語では、他の言語(シンハラ語、英語)よりも、この現象を表現するのに様々な術語が使われており、そのすべてが、「動作主の意志、意図」というような二点により区別されているということになる。「意図」と「意志」は密接に関係していると言える。しかし、「意図」は「目的の有無」とかかわるが、非意図的とは、「何の目的もなく」というような意味を含意するため、本稿のテーマとは多少異なった解釈になる可能性がある。本稿で扱っている現象と意味的に最も近いものは、日本語における自発の定義である。つまり、「動作主の意志と無関係あるいは反して」というように、動作主の意志を問題にしているものである。しかし、日本語における「自発」はかなり限られた動詞にしか用いられないため、「自発」という術語を、シンハラ語の現象を説明するのに用いるのはふさわしくないと考えられる。

「動作主の意志がない」という意味を表現できることから、本稿でのテーマとなる現象を説明するためにもっとも妥当な術語として「非意志性」を選ぶことにする。

「非意志性とは、動作主の意志がなく、あるいは、意志に反して、何らかの理由で動作主が弱くなり、コントロール不可能、あるいは、コントロールが欠如したときに、引き起こす、あるいは、引き起こすことになる行為のことである。」

本研究では、シンハラ語及び日本語において非意志性がどのように表されるのか、またそのように様々な表し方をする理由は何なのかを詳しく調べていきたい。

3. 非意志性の表し方

シンハラ語では、以下のような2パターンで非意志性を表現している。

- ① 非意志性を表す形態を持つ動詞が述語に現れる
- ② 非意志性を表現する副詞を付加する

3.1 非意志性を表す形態を持つ動詞が述語に現れるもの

3.1.1 シンハラ語における非意志性と形態的特徴

シンハラ語では、意志動詞語幹における母音、つまり、語幹初頭の母音と語幹末の母音を前母音に交替することにより、非意志動詞が形態的に作られる。基本的に、意志動詞の場合、語幹末は後母音になる傾向が強いのに対し、非意志動詞の語幹初頭や語幹末は前母音になる傾向がある。以下の例を参照。

日本語訳	意志動詞	意志動詞語幹	非意志動詞	非意志動詞語幹	母音交替規則
食べる	kanawa	ka-	kæwenawa	kæwe-	a, ø →æ, (w)e
切る	kapanawa	kapa-	kæpenawa	kæpe-	a, a →æ, e
選ぶ	to·ranawa	to·ra-	te·renawa	te·re-	o:, a →e:, e
見る	balanawa	bala-	bælenawa	bæle-	a, a →æ, e
破る	iranawa	ira-	irenawa	ire-	i, a →i, e
上げる	ussanawa	ussa-	issenawa	isse-	u, a →i, e

表1

このような非意志動詞が述語に現れる文は、動作主の非意志性を意味する。

例 1a) *mamə bat kanawa*

私は ご飯を 食べる

Sub Obj V (vol)

b) *matə mas kəuna*

私に 肉を 非意志的に食べてしまった

Sub(Dat) Obj V(inv)

1a)では、動作主の私が「食べる」という行為を意志的に引き起こすため、意志動詞が述語になっている。それに対し、1b)では、「私」が動作主の立場にあることは変わらないが、引き起こした行為には動作主の意志がない。1b)を解釈すると、「動作主の私は、普段肉を食べないか、肉を食べないと意識していたが、何らかの理由で、自分の意志に反して肉を食べるという行為を行った」という意味になり、それを、述語に現れる非意志動詞が表現している。さらに、動作主の格が「与格」に変化している。シンハラ語の場合、動作主が意志的行為を引き起こす文では基本的に格を持たない。しかし、非意志的行為を表す場合、動作主には格が現れる。シンハラ語の動詞が形態的に非意志性を表現する場合、以下のような構造をなしている。

- (1) 「Agn(Dat) Obj/Ø V(invol)」
- (2) 「Agn(Gnt) 手(Inst) Obj/Ø V(invol)」

3.1.2 日本語における非意志性と形態的特徴

3.1.2.1 非意志的自動詞

日本語にも、意志・非意志の区別はあるが、まず、それは、自動詞における意志を表す自動詞、非意志を表す自動詞という区別である。

『日本語文法』（名古屋大学日本語研究会 2006年GA6）は、意志・非意志の区別を自動詞の2種類として分類している。そして、意志的自動詞と非意志的自動詞の例として以下の動詞を例示している。

意志的自動詞	非意志的自動詞	非意志的自動詞	意志的他動詞
遊 ぶ	...	治 る	治 す
騒 ぐ	...	落ちる	落とす
泣 く	...	消える	消 す
笑 う	...	割れる	割 る
飛 ぶ	...	折れる	折 る
歩 く	...	転 ぶ	転ばす

表 2

意志的自動詞に形態的に対応する非意志的自動詞は基本的に存在しない。孫東周（1999）は、この種類のことを無対自動詞として扱っており、無対自動詞は動作が動作主の意志によって行なわれる場合に用いられるが、ガ格名詞によってコントロールできない無意志的な動作を表す場合もある。また、無対自動詞は、自然現象の変化や無意志的な心理状態や生理的な現象、あるいは物の自然な変化も表す。それから、働きかけによらない人や植物の生育に関わる状態変化、あるいは変化を前提としない人や物の単純状態も表すと述べている。

すなわち、無対自動詞あるいは意志的自動詞が述語になる文は、場合により、非意志的または自然現象を表すことがあるということになる。そのため、主語あるいは動作主は有生名詞になることが多いが、有生名詞だけに限ることはないということになる。

それに対し、非意志的自動詞に対応して意志的他動詞がある。孫東周（1999）はこの種類のことを有対自動詞として扱っている。ここでは、意志・非意志という区別よりも、自動詞と他動詞として分類していると考えられる。有対自動詞あるいは非意志的自動詞が述語になる文構造における主語については以下のような研究がある。

早津（1987）は、有対自動詞として扱っているこの種類の動詞は、働きかけによって引き起こしうる非情物の変化を表すので、主語は非情物であり、ガ格名詞に有情物がきても動作性を感じることができないから、有情物としての人とは言いがたいとする。

この点に対しては、西尾（1978）も、非意志的自動詞あるいは有対自動詞の場合、意志形や命令形が本来の意味として用いることができないか不自然であるのは、「有対自動詞の主語が非情物であることから生じる現象である」としている。

孫東周（1999）は、早津がガ格名詞について述べている「ガ格名詞が動作性を表さない」という点と、西尾が述べている「有体自動詞の主語が非情物であるから意志形や命令形が本来の意味で用いられない」という点を指摘している。孫東周は、有体自動詞の主語に有情物がくる場合もあるし、その場合ガ格名詞には動作性があるとして、有対自動詞と無対自動詞についてより具体的な分析を行っていると考えられる。

前述したことも踏まえ、シンハラ語と比較した場合の、日本語の非意志的自動詞とはどういうものなのかを以下の例でまとめておく。

例:2 a) 私は黒板を消した

mamə kalu læ:lla mækuwa

Sub Obj V(vol)

b) 黒板が消えた

kalu læ:lla mækuna

Obj V(invola)

c) ??私によって 黒板が消えた

mage atiq kalu læ:lla mækuna

Agn(Gnt) 手(Inst) Obj V(invola)

例:3 a) 私は大きい声で騒いだ

mamə haiyen kæ:gæhuwa

Sub Adv V(vol)

b) ??私は大きい声で非意志的に騒いだ

matə haiyen kæ:gæhuna

Agn(Dat) Adv V(invola)

2a)は意志動詞述語の場合であり、シンハラ語も日本語も同じように、「主語＋目的語＋意志動詞」の順になる。2b)では、2a)で目的語の位置に現れた「黒板」が主語になり、非意志的自動詞が述語になっている。そこには動作主が現れていない。あるいは、文中での意味を考えた場合、動作主の必要性が感じられない。意味的には、シンハラ語も日本語も同じように、「黒板に書いてある文字が消えた」という出来事を表現している。2c)の日本語の場合、容認度が2b)よりずっと低い。その理由は、動作主の「私」が現れているからだと考えられる。シンハラ語の場合は、動作主が現れても容認可能だが、それは「属格＋具格」の組み合わせで動作主の非意志性を表現しているからである。日本語では、動作主の非意志性は、形態的に十分表現できない傾向が見られる。つまり、「によって」

だけでなく、どのような格助詞（が、は、を、に、で、からなどの）が現れても、「私」という動作主の非意志性を表すことはない。そのため、日本語の非意志性を表す文には、動作主の現われが見られないと考えられる。

3a) は意志的自動詞が述語になった場合であり、シンハラ語も日本語も同じく「主語+目的語+意志的自動詞」という順で現れる。ただし、3b) で非意志的動作を表す場合、日本語は、動作主を表すことがむずかしく動詞の形は変化を伴わない。非意志性を表現するのであれば、「非意志的に」などの何らかの形で「非意志性」を表す語を足す必要がある。3b) のシンハラ語は、「私は本当はそんなに大きい声で叫ぶつもり、意識、意志がなかったが、何らかの理由で非意志的に騒ぐことになった、あるいは騒いだ」という意味を表現している。

また、日本語における多くの非意志的自動詞には、動作主の現れが見られず、話者自身は引き起こされた動作の被害者あるいは経験者になっているかのような意味を含意することが多い。

例:4 コップが割れた

(mage atin) ko:ppe kæduna

Agn(Gnt) 手(Inst) Obj V(invol)

例4は、日本語の場合、話者自身が引き起こされた行為の被害者になっているような意味を含意する。しかし、その行為を話者自身が引き起こしたのかは、その文では不明である。動作主の含意はまったくない。そのため、非意志的行為かどうか判断できない。

シンハラ語の場合、属格と具格の組み合わせで動作主を表現することができる。動作主の現れが明白な場合と、文中に動作主が現れない場合があり、後者は、意味的に話者自身を含意していることが多い。どちらにしても、非意志的な意味かつ引き起こされた行為に対する後悔などが含まれている。間接的に動作主が被害者にもなっているだろう。例4の文は話者自身の責任として発せられたものであり、動作主の現れがないとしても非意志的な意味を含意する。また、日本語と同じように、話者自身が被害者になるような意味も場面によっては解釈できるが、判断できない場合もある。

つまり、日本語の非意志自動詞は必ずしも「動作主の非意志性」を表すとは限

らないのに対し、シンハラ語の非意志動詞は必ずしも「話者が行為あるいは出来事の被害者になることを表す」とは限らない。

非意志性を表現できる動詞カテゴリーについてここで簡単にまとめると、シンハラ語の場合、動作動詞つまり、主体動作動詞、主体変化動詞、主体動作・客体変化動詞というようなすべての種類に非意志的形式がある。しかし、日本語の場合、主体の動作動詞に対応する非意志的形式と主体動作・客体変化動詞に対応する非意志的形式は存在しない。主体変化動詞として現れるものは基本的に自動詞が存在する。以下の表を参照。

視点による動詞分類	シンハラ語		日本語	
	意志的	非意志的	意志的	非意志的
主体動作動詞	kanawa(食べる)	kæwenawa	食べる	なし
主体変化動詞	kadanawa(壊す)	kædenawa	壊す	壊れる
主体動作・客体変化動詞	hadanawa(作る)	hædenawa	作る	なし

表 3

以上あげた点をふまえ、以下には、日本語及びシンハラ語における非意志性を表す動詞とは、どのようなものなのかをまとめておく。

言語	形態的特徴	統語的特徴		意味的特徴
		動作主	主語	
日本語	特に見られない	動作主の現われがまったく容認不可能	(1)主語はガ格と一緒に現れる (2)無生名詞主語がくることが極めて多い	話者自身が被害者になっていることが多い
シンハラ語	非意志的動詞の語幹初頭及び語幹末は「前母音」に交替する	(1)動作主が「与格」あるいは、「属格+手の具格」の組み合わせで表現できる (2)動作主を表現しない場合、話者自身として解釈することが多い	(1)動作主以外の項は基本的に格変化を伴わない (2)無生名詞主語も有生名詞主語も取る	動作主の現われあるいは含意があり、動作主が引き起こした行為の非意志性を表現している

表 4

つまり、日本語における非意志的自動詞は、シンハラ語における非意志性とは多少異なった現象であるということになる。次に、定義上は一致している自発とどのような類似点がありどのように違っているのかを調べてみることにする。

3.1.2.2 自発

渋谷勝己（2006）は、共通語では自発というカテゴリーが十分に分化していないが、一部の方言ではそれが盛んに用いられていると述べている。自発については、共通語にそのまま対応する適切な形式がない。現代共通語の自発文は、思考動詞や感覚動詞など、ごく一部の動詞に助動詞（ラ）レルが付加して作られるものにすぎないと述べている。

植田瑞子（1998）は、「自発」表現に使われる形態のうち、現代日本語でもっとも典型的な形態はレル・ラレル形を取る自発形だが、まだ研究が充分とはいえない部分があると述べている。この研究によれば、「自発」表現には異なる二系列の文がある。これらは、A型動詞—感情、心情を表す動詞とB型動詞—思考、判断を表す動詞というように二グループに分類されている。

以下の表は植田瑞子（1998）の動詞例を使って作成したものである。

A 型動詞	自発形式	B 型動詞	自発形式
悩む	悩まれる	望む	望まれる
思いやる	思いやられる	考える	考えられる
案じる	案じられる	想像する	想像される
感じる	感じられる	期待する	期待される
苦しむ	苦しまれる	判断する	判断される
思い出す	思い出される	推定する	推定される
偲ぶ	偲ばれる	見る	見られる

表5

以上の表に分類されている動詞の特徴を検討すると、そのほとんどは、精神的な活動を表すものである。つまり心理動詞である。工藤（1995）は、心理動詞を「内的状態動詞」と「非内的限界動詞」に分類し、思考動詞、感覚動詞、知覚動詞、感情動詞の4種類に分けている。その四種類の動詞のすべてが自発形式になれるように見える。以下を参照。

心理動詞	本動詞	自発
思考動詞	思う →	思われる
感情動詞	悩む →	悩まれる
感覚動詞	痛む →	痛まれる
知覚動詞	感じる →	感じられる

表 6

シンハラ語の場合は、日本語と違い、本来の意味が精神的な活動を表すものだけでなく、動作動詞の多くも非意志性を表す形態を持つことができる。

例として、食べる、飲む、書くが挙げられる。

しかし、非意志性を表す形態をとった後は、動作動詞の場合にも、何らかの心理的な関連性が見られるというような類似点がある。例えば、「(書く) liyanawa」は動作動詞であるが、その非意志的形式「liyawenawa」の場合、動作主自身が、何らかの精神的な活動の影響で自然に行う行為という意味を含意する。この点は、以下の例文での目的語の容認度によって判断できる。

例:5a) mamə liyumak liyanawa

私は 手紙を 書く

Sub Obj V (vol)

b) ? matə liyumak liyawenawa

私には 手紙が 非意図的に書く

Sub(Dat) Obj V(invol)

c) matə kawī liyawenawa

私には 歌が 非意志的に書く

Sub(Dat) Obj V(invol)

5a)は意志動詞述語の文であり、その非意志的形式が5b)で容認不可能な理由は目的語にある。目的語を「歌」「詩」「俳句」などに変更すれば、非意志的形式が容認可能な文になる。つまり、「手紙」は、基本的に動作主が意志的に書かなければならないのに対し、「歌」などは、非意志的に心の中で生まれた気持ちをまとめて書くこともあるので容認できるのである。つまり、非意志的形式を持つ動作動詞は精神的な活動を表すことになるのである。

では、シンハラ語と日本語の自発文の構造を比較してみよう。

6a) 私には 今日このかばんが普段より重く感じられる

Agn (Dat) Obj V (invol)

b) matə adə me bæ:ŋ eka wenadata wada barata dænenawa

Agn (Dat) Obj V (invol)

7a) 私には そのように 思われる

Agn (Dat) V (invol)

b) matə ehema hitenawa

Agn (Dat) V(invol)

シンハラ語の非意志性を表す文と日本語の自発文の構造にはもう一つ類似点が見られる。それは、動作主を表す格には、シンハラ語でも日本語でも同様に「与格」が使用されることである。このように見てみると、シンハラ語の「非意志性」に近い日本語の「自発」は、心理動詞、つまり、精神的な活動を表す感情動詞、思考動詞、感覚動詞、知覚動詞というように、感情や心情または思考、判断や感覚などの意味の動詞に限られるが、シンハラ語では、心理動詞も動作動詞も非意志的形態を持つことができ、日本語と比べてより広い範囲で使われるということになる。

また、形態的レル・ラレルには、自発だけでなく可能・受身など他の作用もあるため、シンハラ語において非意志性を表現する形態とはまた異なるものである。シンハラ語において非意志性を表す形態にも「受身」の意味があるが、日本語のように可能などの作用はない。以下では、シンハラ語の非意志性と日本語の自発の性質をまとめておく。

言語	形態的特徴	統語的特徴	意味的特徴
シンハラ語	語幹初頭及び語幹末が「前母音」に交替する	動作主あるいは経験者を表す格は、「与格」を取る場合と「属格+具格」をとる場合がある。 「動作主(与格/属格+具格)主語+動詞(非意志的)」	動作主が何らかの理由で非意志的に引き起こした行為を意味する。基本的には、動作主の後悔、マイナスの気持ちを表すことになる
日本語	五段活用の一グループの動詞には「レル」、二グループの動詞には「ラレル」が付加される	動作主の現われがなくても容認できるが、現れる場合、「与格」で現れることが多い。 「動作主(与格)主語+動詞(自発)」	動作主が現れる場合もない場合もありうるが、どちらにしても、動作主の活動あるいは行為についてではなく、精神的な活動の自発性を表している。

表7

シンハラ語における非意志性と日本語における非意志自動詞または自発を比較した場合、使用される動詞のカテゴリー、動作主や動作主を表す格、形態的作用についての類似点や相違点は、以下のようにまとめられる。

比較する項目			非意志性 (シンハラ語)	非意志自動詞 (日本語)	自発 (日本語)
視点中心	動作動詞	主体動作動詞	○ (kæwena 食べる)	×	×
		主体変化動詞	○ (idagænenawa 座る)	×	×
		主体動作・客体変化動詞	○ (kædenawa 壊れる)	○ (kædenawa 壊れる)	×
心理動詞	内的	思考動詞	○ (hitenawa-思う)		○ (思われる)
		感情動詞	○ (sathutuwenawa 喜ぶ)		○ (喜ばれる)
心理動詞	非内的	知覚動詞	○ (æhenawa 聞こえる)		△
		感覚動詞	○ (dænenawa 感じる)		△
動作主の現れ			○	×	○
動作主格	与格 (属格+具格)		○ (ta)	×	○ (に)
			○ (~ge atiq)	×	×
主語名詞	有生名詞 無生名詞		○	○	×
			○	○	○
形態の他の作用			○ (受身)	×	○ (受身、可能)

表8

「○」はある、「×」はない、「△」はある場合もない場合もあることを意味する。

以上の表を検討すると、日本語における非意志自動詞は、シンハラ語において非意志性を表現する動詞カテゴリーの中でほんの一部しか占めない非常に限られたものであることがわかる。それに対し、自発は精神的な活動を表す動詞を用いるが、すべての心理動詞が自発の意味を表すわけでない。心理動詞の中でも内的心理動詞に限られると考えられる。動作主の現れについては、非意志的自動詞は動作主の現れが容認できないのに対し、自発の場合、動作主を表すことができる。しかし、自発における動作主は、シンハラ語における動作主と異なり、精神的な活動の非意志性、つまり自発的な精神活動しか表現しないのである。また、自発は形態的に表現することがあるが、その形態には自発以外の作用もあるので、自発の形態として扱うことには問題がある。このように、シンハラ語における非意志性は、日本語の非意志自動詞または自発の両者とは多少異なった現象として扱う必要があると思われる。では、シンハラ語における非意志性が日本語で形態的に表現できないとすると、どのような方法で表現しているのだろうか。ここまで統語構造の中で主語、動作主やその格、または動詞という二点だけを考えてきた。次に、副詞の作用はどうであるかを調べることにする。

3.2 非意志性を表す副詞

李澤態 (2003) は、副詞の定義を以下のようにまとめている。「副詞とは、一般的にそのままの形で (用言のように活用せず) 主語とならず、主として動詞や形容詞を修飾する働きをする語を言う」。また、意識や意図にかかわる語は、副詞分類からすると、情態副詞、つまり、動作、作用、または実態のあり方を表し、主として動詞を修飾する副詞の種類に属すると述べている。シンハラ語では副詞を「*kriya visheshana* (動詞修飾語)」として扱っている。次に、シンハラ語と日本語における、非意志性を表す副詞の例とその性質についてまとめておく。

3.2.1 シンハラ語における非意志的副詞

以上の李澤態 (2003) の定義からすると、シンハラ語で非意志性を表現するのに使用される語には、典型的な副詞としてみなすことのできるものと、そうでないものがある。両者とも、基本的に、述語に現れる非意志的動詞の非意志性を強

調する役割を果たし、さらに、動詞を修飾しているという類似点が見られる。その点を踏まえると、シンハラ語における非意志性を表す語は二種類に分類できる。一つ目は、明白に副詞とみなされるものであり、用言のように活用せず動詞を修飾している。以下では、Aタイプと呼ぶ。もう一つは、非意志的動詞を修飾する役割には変わりがないが、それ以外の作用もあるものである。動詞修飾の役割においては活用しないが、その他の作用(動詞としても用いる)を表す場合は過去形に活用する。以下では、Bタイプと呼ぶ。

3.2.1.1 Aタイプの副詞 (ibe:tə / ibe:mə / ibe:təmə)

典型的な副詞である。語尾は「tə」「mə」「təmə」。語を修飾する以外、他の役割はない。「mə」は強調の意味を表す形態であるため、必然的なものではなく、省略することも可能である。

この副詞は、動作主の努力または意志がまったくなく自然に、または、意識が欠如した状況での出来事を表現するものであり、動作主の心理的あるいは身体的影響が含まれた、動作動詞、心理動詞の前に現れる傾向が強い。

8. Matə ibe:təmə kə:gəhuna

Sub(Dat) adv V(invol)

私に 自然に・つい 非意志的に叫んだ

ただし、非意志性を表すこのタイプの副詞は、非意志動詞と結びついて動詞の意味を強調することはできるが、意志動詞の前に現れて非意志性を意味する力はない。その理由は、意志動詞とともに以上挙げた副詞を使用すると、意味が矛盾してしまうからだと考えられる。以下の例を参照。

9. a) Matə ibe:təmə kə:gəhuna

私に 自然に・つい 非意志的に叫んだ

Sub(Dat) adv V(invol)

b) ??? Mamə ibe:təmə kə:gəhuwa

私は 自然に 叫んだ

Sub adv V(vol)

意志動詞の「kə:gəhuwa」と、非意志的な意味を表す「ibe:təmə」は意味的に矛盾しているから容認度が低い。

3.2.1.2 Bタイプの副詞 (bæri wela/ bæri weemakin)

名詞あるいは形容詞と be 動詞「wenawa」の継続形「wela」、あるいは名詞化された be 動詞が理由を現す形態「n」と結びついたもの、というように複合された形で現れ、動作主のコントロールが失われた状況、または、意識が失われた状況を表現している。動作動詞の前に現れる傾向が強い。

～wela	～weemakin
bæri wela 不可 なる	baeriveemakin 不可能性 で
atapahu wela 見逃し なる	atapahuveemakin 見逃し ので

表 9

6. Mage atin bæriwela malpo:cchiya biduna

Agn(Gnt)+手(Inst) Adv Obj(Acc) V(invol)

私の 手で コントロールできなくて 花瓶 が 割れる

この点に関するシンハラ語の特徴は、非意志的副詞の A タイプも B タイプも動詞を修飾するだけであり、あってもなくても述語動詞により充分非意志性が伝えられるということである。

3.2.2 日本語における非意志的副詞

日本語における非意志性を表す副詞として、李澤態 (2003) では、以下の 16 語を例示している。

うかにも、うかつに、うかうか、うっかりと、つい、思わず、無意識に、
我知らず (に)、いつの間にか、いつしか、ふと、何気なく、何となく、

何だか、どことなく

この研究では、動作主の非意志性を表す副詞を A グループ、意志性を表す副詞を B グループに分類している。李は、非意志性を表す副詞を下位分類し、A I の種類は、主体の抑制あるいは注意が欠如したことが原因とする好ましくない行為、A II の種類は、主体が気がつかないまま行う行為、A II' の種類は、主体が気がつかないうちに行った何らかの状況または行為の変化の結果または変化の始まり、A III の種類は、主体が意図なしにする行為を表す動詞を修飾していると述べている。

李澤態（2003）を参考とした非意志的意味を表す副詞の分類と例

A I	A II	A II'	A III
つい うっかり（と） うかうか（と） うかつに うかつにも	思わず 無意識に 我知らず（に） 知らず知らず	いつの間にか いつしか	ふと（ふっと） 何気なく 何となく 何だか

表10

日本語で非意志性を表すのに、もっとも使用頻度が高い方法は、副詞の使用である。李澤態（2003）は、非意志性を表す副詞には、①情態副詞（動作、作用、または事態のあり方を表し、主として動詞を修飾する副詞）に属するものと②陳述副詞（主に否定・推量・仮定など述語の陳述的な意味を補足強調し明確化する語で、一般的な話者の心的態度を表す副詞）に属するものがあり、その両方の性質を持ちつつ、語によりその一方の性質をより強く持つという連続的な性質があると述べている。

渋谷勝己（2006）は、共通語では、自発の意味を表す非対格動詞「（枝が）折れる」「（糸が）切れる」類の場合、もともと動作主が文構造の中に含まれていないので、「ウっかり」などの、動作主体の存在を前提とする副詞とは共起しないと述べている。

(6) *うっかり枝が折れた（渋谷勝己、2006）

以上の先行研究をふまえて、本稿では、シンハラ語及び日本語における非意志

性を表現する副詞が、シンハラ語と日本語でどのように現れるのかを改めて考察する。そうすると、両言語とも (1) 何らかの理由で (注意不足などで) 動作主のコントロールが欠如したときのものと、(2) 動作主の意識が弱まったときのものというように二種類に分類できると考えられる。

動作主のコントロール欠如を表す副詞		動作主の意識の弱まり・欠如を表す副詞	
シンハラ語	日本語	シンハラ語	日本語
bæri wela bær weemakin atapahu wela atapahu weemakin	つい うっかり うかうか うかつに	ibetə ibetəmə	無意識的に 思わず いつの間にか ふと 何だか

表11

つまり、李が非意図的副詞として分類した AII、AII'、AIII のすべてを動作主の意識の弱まった、あるいは欠如した場合に引き起こすことになった行為を表す副詞として分類する。このように分類することにより、シンハラ語における副詞の数や副詞で表すことができる範囲がいかに少ないものなのかが明白になる。日本語の場合、李が分析したように、副詞をより具体的に分析することが可能である。例えば、AII は主体が気がつかないまま行った行為を表すのに対し、AII' は主体が気がつかないまま行った行為の変化の結果または始まり、AIII は主体の意図なしに行う行為というように分類できる。シンハラ語では、日本語ほど副詞の具体的な働きを分析することは不可能である。シンハラ語の場合、引き起こした非意志的行為が動作主のコントロール欠如なのか、あるいは、意識の欠如なのかという分類しかできない。

3.2.3 シンハラ語と日本語における副詞使用

シンハラ語では、非意志性を表す副詞または語は、日本語に比べ数が少ない。また、その副詞は、意志的動詞と一緒に表れて非意志的意味を伝えることはできないのである。つまり、シンハラ語の場合、動詞形式が非意志性を表現するに当たって十分な役割を果たしているのである。

それに比べ、日本語の場合は、非意志性を現すのに副詞が不可欠な要素になっ

ている。そのため、副詞の数もシンハラ語に比べ多い。

4. シンハラ語及び日本語における非意志性の表し方の変異

本稿では、シンハラ語と日本語でどのように非意志性を表現するかについて考察を行い、両言語の相違点や類似点を検討した。まず、シンハラ語では、動詞の形態的で非意志性を表現する傾向が強い。それに対し、日本語の非意志的自動詞と自発を統語的、形態的、または意味的に分析を行った結果、非意志性を表現する形態的な特徴が見られないことが明白になった。また、続いて、副詞の役割について、両言語を検討した結果、シンハラ語は、副詞の数が少なく、具体性も見られないのに対し、日本語では、非意志性を表現するのに、副詞を多数使用すること、かつ副詞の働きについて具体的な分析が見られることが明らかになった。シンハラ語では、動詞の形式により非意志性を十分伝えることができるので、副詞に頼る必要がないと考えられる。それに対し、日本語では、動詞の形式で非意志性を十分に表現することが不可能なため、副詞に頼る傾向が見られると判断できる。

5. 参考文献

- (1) J.B.Dissanayake (2001) *Kriya Padaya* Godage Pot Medura
- (2) Kumarathunga Munidasa (1935), (2006) *Vyakarana viwaranaya* Gunasena
- (3) 李澤態 (2003) 「主体の意図にかかわる副詞（的機能を持つ表現）の意味研究」博士学位論文、名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- (4) 李澤態 (2002) 「非意図的であることを表す副詞（的機能を持つ表現）の意味分析」『日本語化学 12』
- (5) 李澤態 (2006) 「副詞の類義語分析」『言語文化論集 Vol.26』名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- (6) 植田瑞子 (1998) 「「自発」の表現の一考察」『日本語教育 96 号』

- (7) 伊順徳 (2004) 「自発表現としての「よくなる」文」『言語科学論集』第8号
- (8) 孫東周 (1999) 「日本語動詞におけるヴォイスの研究」博士学位論文

(ディルルクシ ラトナーヤカ/言語学)